

研究紀要・年報

縄文の森から

From JOMON NO MORI

第2号

石清水型削器小考
桑波田 武志

南九州貝殻文系土器に見られる地域性について
黒川 忠広

田村式土器とその周辺 (覚書)
横手 浩二郎

上野原遺跡第10地点における石材選択について
八木澤 一郎

「成川式土器」の器種組成について (予察)
—杯形土器の様相を中心に—
相美 伊久雄

古代官衙の立地
—古代の官衙は、鹿児島ではどのようなところに置かれたか—
繁昌 正幸

鹿児島県における荘園遺跡研究の現状
中村 和美

鹿児島県における古代の鍛冶遺構について
川口 雅之

墨書土器の性格
—鹿児島を例として—
坂本 佳代子・岩澤 和徳・松田 朝由

鹿児島県における中世煮炊具の一様相
上床 真

島津本家における近世大名墓の形成と特質
松田 朝由

溝状遺構の一性格
東 和幸

《実践報告》 出土木製品保存処理の現状と課題
永濱 功治

平成14年度 埋文センター年報

鹿児島県立埋蔵文化財センター

2004. 3

『縄文の森から』第2号 目次

石清水型削器小考	桑波田武志 ……………	1
南九州貝殻文系土器に見られる地域性について	黒川 忠広 ……………	11
田村式土器とその周辺（覚書）	横手浩二郎 ……………	19
上野原遺跡第10地点における石材選択について	八木澤一郎 ……………	23
「成川式土器」の器種組成について（予察）	相美伊久雄 ……………	29
古代官衙の立地	繁昌 正幸 ……………	37
鹿児島県における荘園遺跡研究の現状	中村 和美 ……………	55
鹿児島県における古代の鍛冶遺構について	川口 雅之 ……………	63
墨書土器の性格	坂本佳代子・岩澤和徳・松田朝由 ……………	71
鹿児島県における中世煮炊具の様相	上床 真 ……………	81
島津本家における近世大名墓の形成と特質	松田 朝由 ……………	91
溝状遺構の一性格	東 和幸 ……………	109
《実践報告》出土木製品保存処理の現状と課題	永濱 功治 ……………	117
平成14年度 年報 ……………		121

研究紀要

鹿児島県における荘園遺跡研究の現状

中村 和美

Current Studies of the Manor site in Kagoshima Prefecture

Nakamura Kazumi

要旨

鹿児島県の中世遺跡を荘園遺跡という視点で概観した。その視点はまず基礎となる土器研究史を踏まえて課題を指摘した。次に荘園内の経済活動をみるため土器・陶磁器の流通とそれにかかわる遺構と遺跡とに注目した。さらに景観復元、特に「薩摩国伊作庄内日置北郷下地中分図」の比定地における遺跡の動向や集落の変遷が迎れる新平田遺跡の例をみた。景観復元を通し個々の遺跡が荘園内の場として把握すべきことを述べた。

キーワード 荘園, 古代末～中世, 土器研究, 流通, 景観

はじめに

荘園とは貴族・寺社がその領主として私的所有・経営を行う場と定義される。宇野隆夫(宇野 2001)によると、8世紀中ごろ以降、土地の私的所有が制度的に認められてから、16世紀中ごろの武家による所有・経営が優位になるまでがその時期であるとされる。荘園はそこに多様な社会関係がある。したがってその研究は文献史学、歴史地理学、民俗学、考古学など多方面からアプローチをはかり、総合的な調査・研究体制が必要である(甲斐 1992)。

ここにおいて、考古学的視点は、まず基礎として遺物の編年・様相研究、遺構の構成研究をすすめた集落研究、次に生産、流通、宗教活動などの研究があろう。

鹿児島県においては文献史学がその研究をリードしてきた。その研究史をここで解説することは筆者には力量不足であり、本稿の目的ではないので省略する。

日隈正守(日隈 1999)によると、大隅国では11世紀段階で荘園が拡大され、11世紀後半には郡郷制が改編される。また、11世紀前半に成立した島津荘が12世紀前半に大隅国にも形成される。これに対して、国衙領も大隅正八幡宮に寄進されたという。薩摩国においても12世紀中ごろには中世荘園の骨格が形成されたと考えられている。

宇野は荘園の時代を古代前期(8世紀中ごろ～9世紀中ごろ)、古代後期(9世紀末～12世紀はじめ)、中世前期(12世紀中ごろ～14世紀中ごろ)、中世後期(14世紀末～16世紀中ごろ)に時期区分をおこなった。鹿児島県においては中世前期からがまさに荘園の時代である。そして、この前段階である古代後期からがその形成と拡大の時期として認識しておきたい。

本稿はこの時期の遺跡を「荘園」という視点から捉えようとするものである。まず、土器研究、搬入品のなどの分布からみた流通、集落景観等について現状を把握しておきたいと考える。

1 土器研究—研究史をふまえて

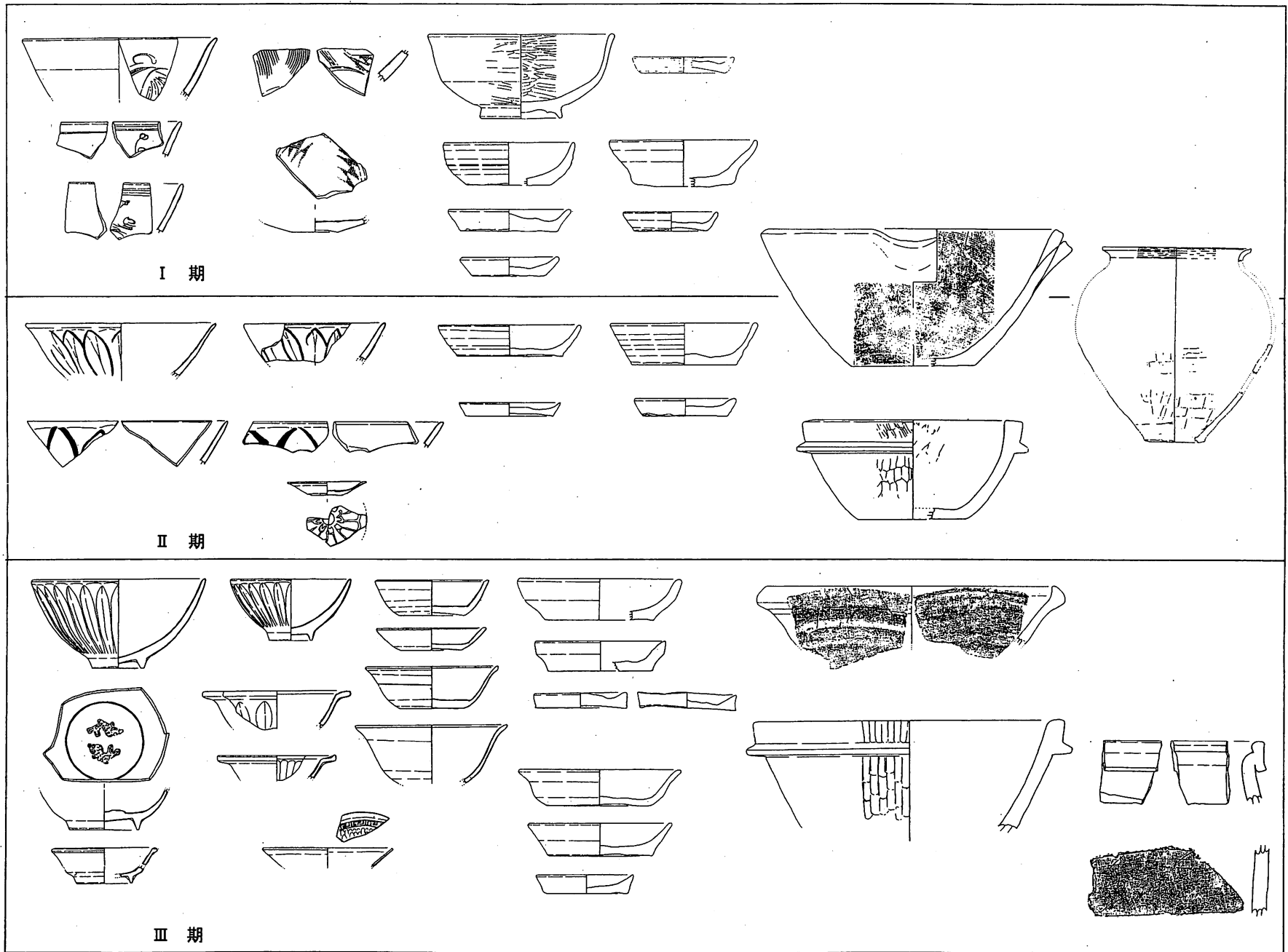
筆者は、薩摩・大隅両国における8世紀後半から13世紀代の在地土器の様相をまとめたことがある(中村和美 1994, 1997)。これでは特に土師器の変遷に注目した。9世紀後半以降について、その要点を抽出すると次の4点である。

- (1) 9世紀後半以降は須恵器の供膳具が生産されず、代わって土師器の供膳具が増加する。
- (2) いわゆる「充実高台椀」の生産も9世紀後半からみられる。
- (3) 10世紀中ごろには土師器小皿が現れる。
- (4) 土師器の底部糸切り技法は11世紀後半から12世紀中ごろの間で導入されている可能性がある。

薩摩・大隅それぞれの様相を示すことを目指したが、1994年当時はまだ資料に乏しく各時期の空白を薩・隅それぞれの資料が補う状態であった。また、11世紀後半から12世紀中ごろまでの間はまったく不明の時期であった。

充実高台椀は大宰府条坊跡出土品が薩摩国からの搬入品として認識され(中島・城戸 1994)、薩摩タイプとしての認識がなされるようになってきている。

中村守男(堂込・中村守 1997)は大口市新平田遺跡出土遺物について分類し、3期に分け、土師器の編年を試み、各時期の様相を次のように提示している。新平田遺跡は大口市平出水新平田に所在する遺跡で、この地は中



第1図 新平田遺跡の遺物編年 (堂込・中村守1997)

世においては牛屎院に位置する。

I期(12世紀中頃～後半) 竜泉窯系青磁碗I-2～4類(内面に劃花文)。同安窯系青磁碗I類・皿I類。白磁はない。黒色土器A類碗, B類小皿が若干出土。糸切り底の回転台土師器の坏・小皿(I類が主)。常滑焼甕が出土。

II期(13世紀初頭～前半) 竜泉窯系青磁碗I-5a・b類(外面片彫蓮弁文・鎗蓮弁文)。土師器の坏・小皿(II類が主)。須恵器鉢。常滑焼甕。滑石製石鍋が出土。

III期(13世紀中頃～14世紀初頭頃) 竜泉窯系青磁III類(全面施釉後畳付の釉を掻きとり, 器壁は薄く厚い施釉)。白磁碗・皿IX類(口禿)。青白磁の小型品(型押の精巧品)。土師器坏・小皿(III・IV類が主)。東播磨系須恵器捏鉢。常滑焼甕。滑石製石鍋が出土。

これは中世前期の南九州における食器様相, 特に編年観や組成を知る上で基礎となる報告である。

次に橋口亘・上東克彦は(橋口・上東2003)は益山荘地域の状況として, 加世田市益山に所在する中小路遺跡と掛ノ上遺跡を取り上げている。中小路遺跡では11世紀後半～17世紀前葉の貿易陶磁器, 国内の広域流通品(備前, 瀬戸・美濃など), 土師器が出土していることをあげている。また, 掛ノ上遺跡では12世紀～13世紀, 14世紀末～17世紀初頭の貿易陶磁, 土師器, 国産陶器が出土していることをあげ, 組成グラフを提示している。しかし, グラフはすべての時期が含まれており, 変遷を捉えるのは困難である。同一荘園内の立地の異なる2遺跡の組成の差異を把握することは, 荘園内の土地利用を考える上でも意義のある分析である。

なお, 宮下貴浩(宮下1998)は, 持鉢松遺跡出土土器・陶磁器について組成表を提示した。しかし, これは本人が述べている(宮下2003)ように, 出土遺物すべてをカウントしたのではなく, 「組成に注目していただくことを念頭においた」といういわば恣意的に抽出された資料を用いたものであり, 取り扱いに注意を要する。ただし, 何が出土したといった定性的な資料把握はなされている。持鉢松遺跡の資料についてはその後調査を行った, 埋蔵文化財センター所蔵資料を含めた, 総破片数の分析を行う必要がある。

研究史を踏まえ,

- (1) タイムスケールとなる在出土器の編年は中世前期を除き, 十分ではない。
- (2) 11世紀後半～12世紀前半は資料そのものが不明である。
- (3) 研究の視点が陶磁器に多く注がれ, 在出土器はよくわからない。
- (4) 食膳具が注目され, 煮炊具, 貯蔵具はよくわかっていない。
- (5) 遺跡間の組成比較があまりなされていない。

などの, 問題点が指摘されよう。近年の調査で資料も増加したこともあり, 過去のデータも含め再度見直す時期になっているかと思う。特に, 組成については破片数によって比較する共通の手法で, とにかく取り組んでいくべきであろう。

2 流通—陶磁器, 広域流通品, 竪穴建物跡, 市

筆者はまた流通について輸入陶磁器の出土分布から9世紀から13世紀代までの流通について論じたことがある(中村和美1994)。その後10年ほど経過し, 遺跡数・資料数の増加はみられたものの, その傾向はあまり変化していない。すなわち越州窯系青磁・白磁I類は県本土と種子島・屋久島までの官衙・寺院もしくは地域の中心的な集落跡で出土する。大宰府磁器区分C期の資料(たとえば白磁IV・V・VIII類)は奄美でも出土する。このことはC期(11世紀後半～)までは, 大宰府を通じた流通がなされるが; それ以降は大宰府を通さない流通域の拡大と南島ルートからの輸入もありうるのではないかと考える。大島郡宇検村倉木崎海底遺跡採集の青磁はそれを強化する事例と考える。また, 新平田遺跡の例で示したように, 広域流通品(常滑焼, 東播磨系須恵器, 滑石製石鍋など)が中世前期相当の遺跡で出土している点も理由のひとつである。

持鉢松遺跡は大量の貿易陶磁器が出土しているが, 中でも貯蔵具である甕, 壺が多く出土していることが注目され, このことが流通拠点的性格をもつ遺跡と考えられている所以である。同時に畿内型瓦器碗の存在は注目される。薩摩・大隅国において瓦器碗は生産されていないと考えられる中で, 畿内型(特に楠葉型, 和泉型など)瓦器碗の存在は搬入の担い手など十分検討しなければならない課題である。

もう一つ, 遺構からの視点として竪穴建物跡がある。堂込秀人(堂込2003)は中世前期にみられる竪穴建物跡を「海運や内陸水運網で結ばれたなかで, 陸運が整備されていくが, その過程で竪穴建物が出現していく。」としている。新平田遺跡や川内市成岡遺跡などでみられるこの遺構が, それぞれの所属する荘園内でどのような位置にあり, 機能したかを歴史地理的・景観的に把握する必要がある。

流通に関する拠点的な場として「市」についてみてみる。たとえば「市」という名のついた遺跡—たとえば市ノ原遺跡(日置郡市来町・東市来町), 市菌遺跡(日置郡金峰町)では, 流通を考える資料に乏しいのが実態である。

文献では14世紀代, 薩摩国の市に関する記録は3つある。1伊作荘「宮内名市庭」文保1(1317)年(日置郡吹上町中原)2入来院「塔原郷借屋崎村」嘉暦3(1328)年(薩摩郡樋脇町塔之原)3「加世田別符地頭市」永和

1 (1375) 年である。井原政純は宮内名と「宮内名市庭」の位置を地名によって復元されている(井原 2003)。これら周辺の遺跡に調査が待たれるところである。

以上のように、荘園内における流通経済に関する課題は、広域流通品の分布と組成、竪穴建物跡のあり方、市の実態研究などがある。あわせて荘園をつなぐ道などルート研究も重要となる。

3 集落景観

橋口・上東は益山荘内における中小路遺跡の意義について「沙弥行恵譲状などからは、益山荘の農村的な景観が垣間見える。日頃は農村部のような地域に、交易や物資運搬等を目的とする臨時的な場が設けられ、それが中小路の出土遺物に反映しているのだろうか。」と述べている(橋口・上東 2003)。荘園内には様々な機能があり、社会活動があること認識したと思われる。

ここでは、荘園内の様々な場を空間的とらえるための試みを行う。その手がかりとして、残された絵図と比定地内の遺跡から場をみていく。次に、発掘調査からえられた、中世の景観復元を通して検討してみたい。

「薩摩国伊作庄内日置北郷下地中分図」のなかの遺跡

伊作庄日置北郷は近衛家領で領家は興福寺一乗院で地頭大隅氏との間で下地中分をおこなった。絵図は元享4(1324)年に作成された。現在の日置郡日吉町吉利付近にあたる。数少ない下地中分図のひとつである。

「薩摩国伊作庄内日置北郷下地中分図」は三木靖、高島緑雄、黒田日出男らによって研究されてきた。3氏それぞれの比定案があるが、本稿では黒田による現地比定(黒田 2000)により、その範囲内の遺跡についてみてみる。

その範囲に現在、周知の遺跡は20カ所ある。この中には「領家政所」も含まれている。縄文1カ所、弥生2カ所、古墳3カ所、古代3カ所、中世10カ所、近世2カ所と中世の遺跡が多いがこのほとんどはこの絵図が作られた後の城跡である。発掘調査が行われ、報告書が刊行されているものについてみていく。

原口遺跡(日吉町吉利字原口)

標高約40mの台地上に位置し、調査時は畑であった。「地頭所」「領家政所」の東、200mに位置する(地頭方)。縄文時代晩期の土器・石器、弥生時代の土器、古墳時代の竪穴住居跡1基や土器、8世紀代の須恵器、10世紀後半の土師器、黒色土器A類、12世紀後半の墓と思われる土坑3基ほか土師器、黒色土器A類、青磁、白磁、青白磁、滑石製石鍋など、16世紀後半代の染付が出土している。12世紀後半頃は墓域であったか?

六ツ坪遺跡(日吉町吉利字六ツ坪)

大川の河口流域に広がる水田地帯に西面する小高い丘陵地に位置し、調査時は畑であった。地層断面をみる

と水田であったことがわかる。「吉利田」(地頭方)に比定される。弥生時代前期の竪穴住居跡(いわゆる「松菊里タイプ」)1基や土器・石器、古墳時代の竪穴住居跡1基や土器、9世紀末から10世紀前半の土師器、須恵器、越州窯系青磁が出土している。弥生、古墳時代においては集落であり、特に古代においては地域の中心的集落であった可能性がある。中世の資料はなく水田化したのは近世以降と思われる。

瀬戸口遺跡(日吉町吉利字瀬戸口)

沖積低地に接した北面する丘陵の裾部で、湿地帯に立地し、調査時は畑であったが、地層断面をみると水田であったこともわかる。「地頭所」などの所在する台地の北側「吉富内富田」(領家方)に比定される。縄文時代晩期の土器と8世紀後半～9世紀初頭の須恵器、土師器が主体で、10世紀初頭頃の土師器、中世後期の竜泉窯系青磁稜花皿も出土している。水田化したのは近世になってからと思われる。

古墳時代は原口遺跡、六ツ坪遺跡で住居跡があり、集落が点在していた可能性を示している。10世紀初頭頃は六ツ坪遺跡の遺構は乏しいがこの付近に中心集落があった可能性がある。ところが、中世において荘園化すると、その管理地は台地の上に移動し、墓地もその周辺につくられ、かつて集落であった場所はその機能を失ったと考えられる。そして、荘園が崩壊した近世に至っては水田化または畑地化してしまったと思われる。

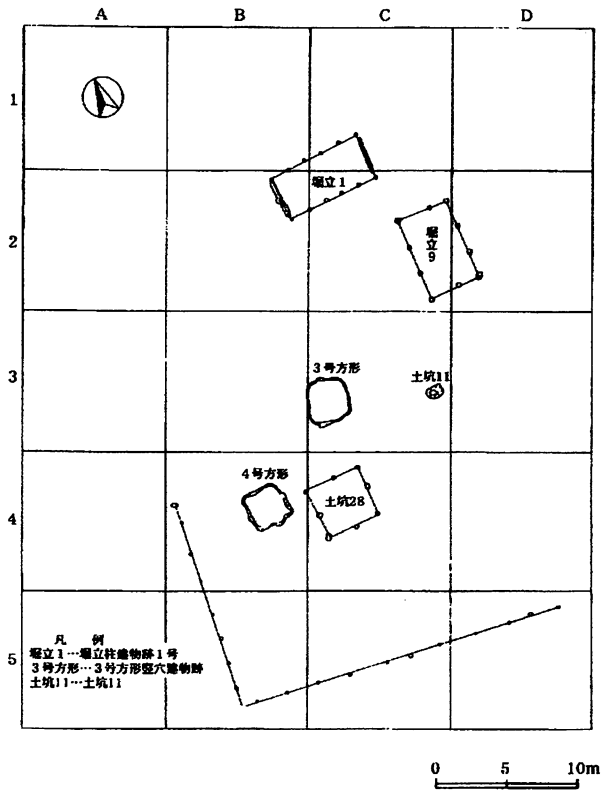
将来的には、「領家政所」「地頭所」などの調査が行われ、荘園管理の実態がわかることを期待したい。しかしながら、周辺の水田はすでにほ場整備が終わっており、水田の水かかり調査などができなかったことは残念でない。

新平田遺跡とその周辺

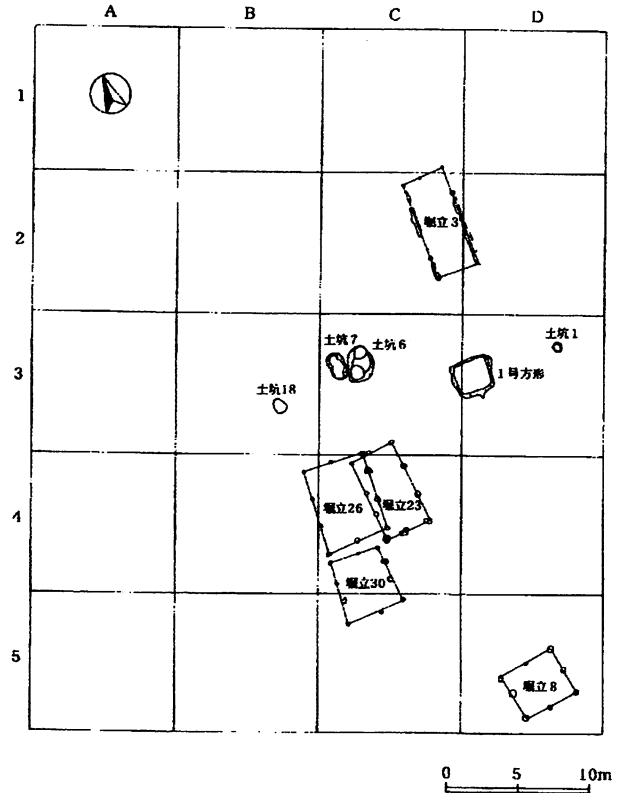
新平田遺跡は川内川の支流、平出水川によって形成された標高約210mの沖積地に位置する。この沖積地はほとんど水田であり、遺跡の場所はやや微高地であったと推定される。周辺遺跡をみると、対岸に中世の集落跡である馬場A遺跡、台地上には平泉城跡、淵辺城跡などがある。このように、現況は水田でも中世までは集落が存在したことが確認される。新平田遺跡はこの中で流通に関連する遺跡と考えられている。

次に、新平田遺跡の中世集落の変容をみてみる。I期においては3棟の掘立柱建物跡と2基の竪穴建物跡、土坑が柵跡で仕切られている。II期では10棟の掘立柱建物跡と4基の竪穴建物跡、3条の柵、土坑から構成される。建物の配置は重複はないものの接近しており、また煩雑な感があるのでさらに2時期以上に分かれる可能性がある。6号掘立柱建物跡は2間×2間で4面庇をもつこの遺跡で唯一のものであり、新平田遺跡最盛期の所産であろう。III期は5棟の掘立柱建物跡と1基の竪穴建物跡、

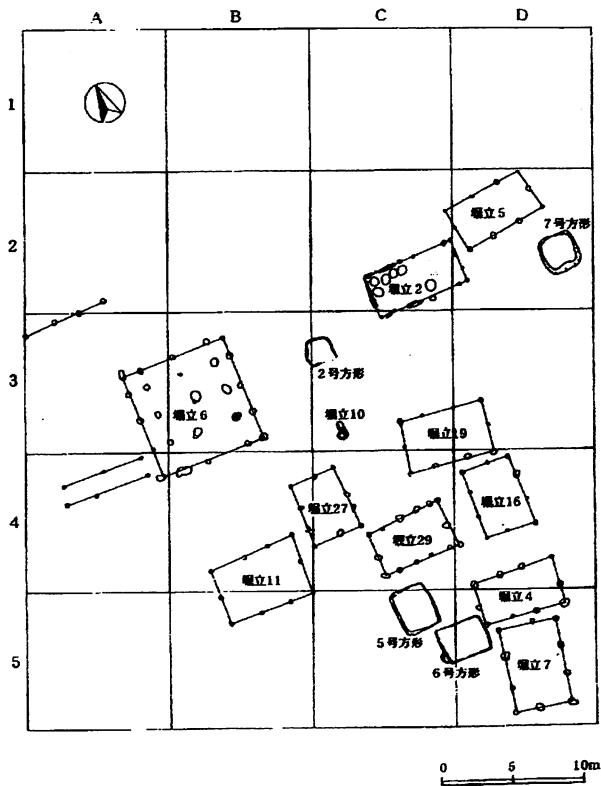
I 期



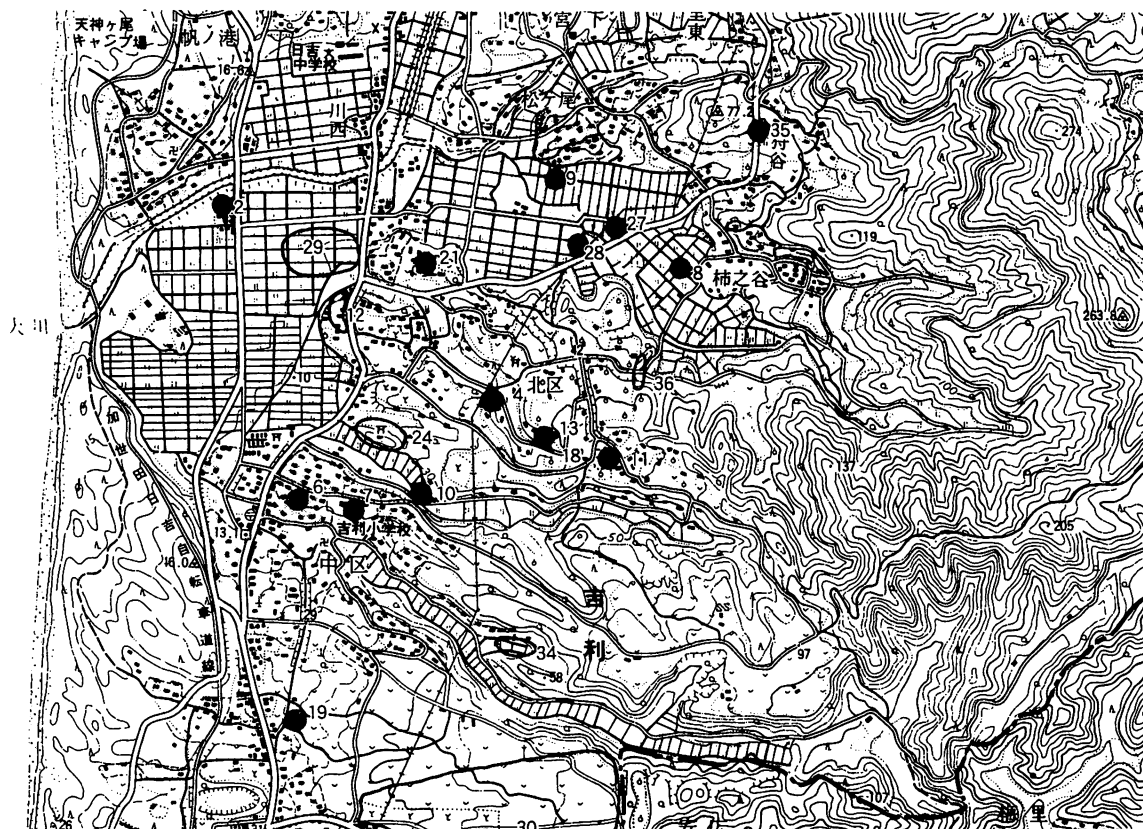
III 期



II 期



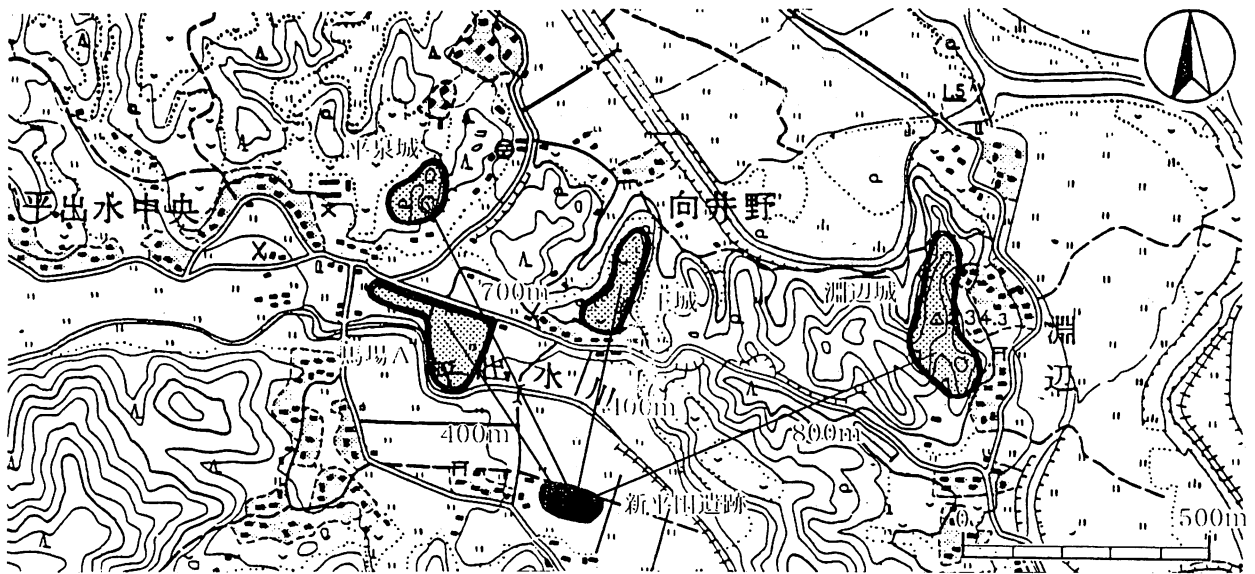
第3図 新平田遺跡の集落変遷図 (堂込・中村守1997)



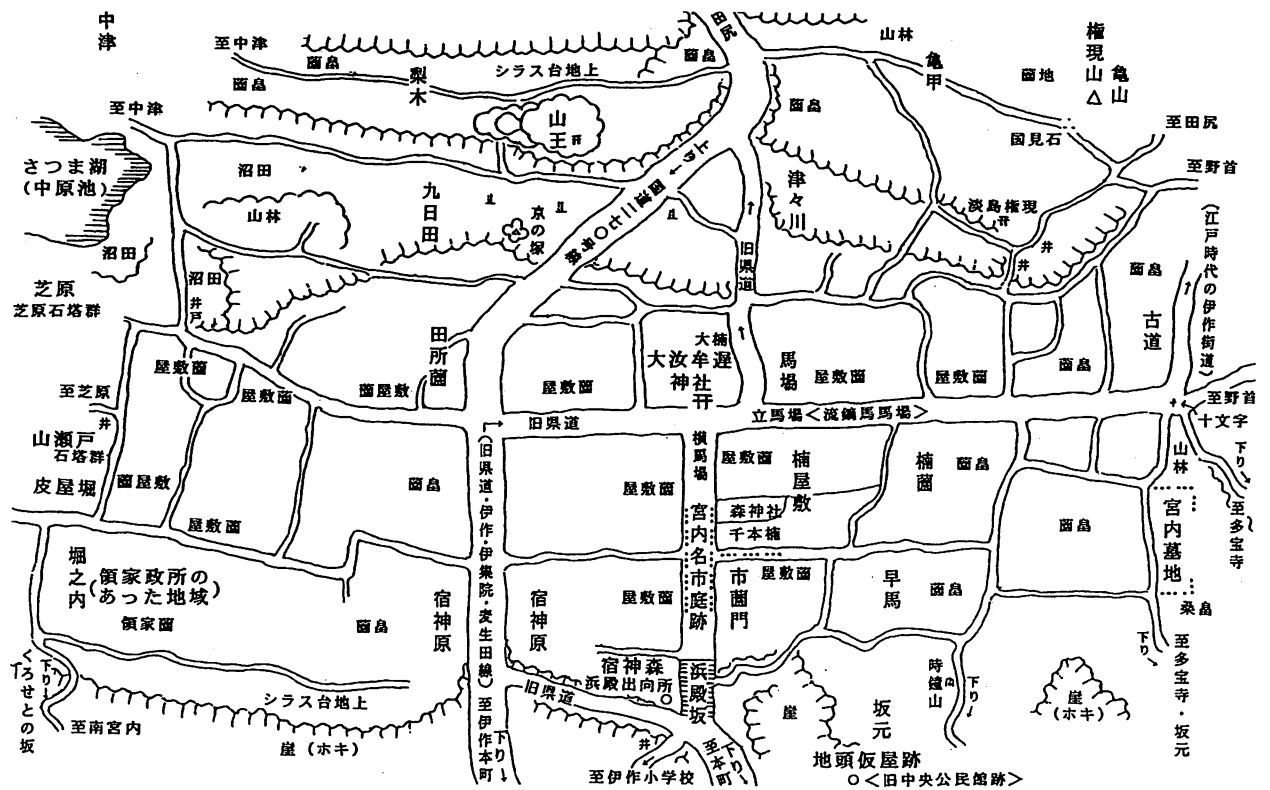
第4図 「薩摩国伊作庄内日置北郷下地中分図」比定地内の遺跡（馬場2002）

番号	遺跡名	所在地	地形	時代
2	大川	日置	低地	弥生・古墳
4	勝雄寺跡	吉利	台地	近世
6	若松城跡	吉利麓	低地	中世(南北朝)
7	南谷城跡	吉利麓	台地	近世
8	井尻城跡	吉利(西山)	丘陵	中世
9	井手ヶ城跡	吉利5141の1	丘陵	中世
10	勝手ヶ城跡	吉利(鬼丸)	丘陵	中世
11	吉利古城跡	吉利字原田	丘陵	中世
12	野崎城跡	吉利(鬼丸)	台地	中世
13	領家政所	吉利字前畑	丘陵	中世
18	吉利島津家初代の墓	吉利(原口)	台地	
19	鹿児島塚	吉利(片町)	低地	戦国
21	園林寺跡	吉利(天司)	丘陵	中世・近世
24	春日城跡	日置字春日	丘陵	中世(南北朝)
27	井尻	吉利字井尻	低地	古墳・古代
28	瀬戸口	吉利字瀬戸口	低地	古墳・古代
29	六ツ坪	吉利字六ツ坪	低地	弥生～古代
34	菱ヶ宇都	吉利字菱ヶ宇都	台地	縄文
35	野中	日置(旭東)	台地	古墳
36	原口	吉利(西山)	台地	縄文、古墳～中世

第1表 比定地区の遺跡地名表



第5図 新平田遺跡と周辺遺跡の位置 (堂込・中村守1997)



第6図 宮内名市庭復元図 (井原2003)